

デイケンズ瞥見

梅 宮 創 造

一、メアリ・ホガースの死

近頃ではイギリスを訪れる客も珍しくなくて、知る人ぞ知るといふ話でもないのだが、ロンドンのダウテイ街四十八番地にデイケンズの家がある。その昔、若きデイケンズが作家稼業に乗りだして初期の日々を過した家である。

十九世紀の当時は、この界限も今とは違って粹な連中が住んでいたらしく、ダウテイ街の入口などには鉄門が設けられて門番が見張っていた。デイケンズはこの横丁に移る一年ほど前、近くのファニヴァルズ・イン十五番地で妻を迎えたが、転居の折には生れたばかりの長男チャールズも一緒であった。作家として、また一家の主として、ダウテイ街の新居はデイケンズの人生の新しい出発を飾る地であった、と云えるかも知れない。

現在、デイケンズの家を訪れて三階までの階段を上り

つめると、「メアリの寝室」に至る。扉の正面に貼りつけた小さな白札には、ここにてメアリ・ホガース死す、との黒字が刻まれている。

メアリの寝室は、一見したところ僅かに六畳ほどであろうか、簡素な板張りの床をむき出しにして天井も甚だ低い。見るからに寒々しい部屋である。東方に面して白樺の窓がただ一つ、北側の壁には小ぢんまりした暖炉が切られている。十七歳にして忽然と世を去ったメアリの寝台はもはや無いが、寝台の置かれていたらしい位置はおおよそ見当がつく。

炉棚の上方の壁面に、H・K・ブラウン、すなわち「フイズ」の手になるメアリの素描画が掛けてあつて、デイケンズが狂おしく慕った義妹の面影を今に偲ぶことができる。さらにもう一点、メアリの横顔を描いた小ぶりのスケッチが窓辺の硝子箱のなかに展示してあり、これも興味ぶかい。ふつくとした顔に小さく引締まった口もと、広いおでこ、明るい瞳、髪は髻にまるめて耳から顎すじ、さらに肩までを露に見せている。美人とよぶべきか否か迷うところだが、これに似た女性の容貌なら、以前、イギリスの古い小説の挿画にも見たような記憶がある。ともあれ、デイケンズ自身にとっては、彼女こそ

「天使」なのであった。

デイケンズはメアリの死後ほどなく友人宛の手紙に記している。「——あれほど完璧な人はいない。彼女の心の奥の奥まで、またその真価の一片一片を、私は余すところなく知っている。彼女はまさしく完全無欠だった。……」(一八三七年五月十七日、トマス・ピアド宛)

この「完全無欠」の乙女メアリの裡側に耀いていたものが、死によって一段と純化され、益々凝縮されて、爾来、デイケンズの数々の作品のなかに影をとどめることになったのである。

フィズの素描画はメアリの死後に制作されたものだが、これとは別に、生前のメアリを描いた肖像が一つ存在していたようである。¹⁾ こちらはメアリ歿後六年にして彼女の母親からデイケンズに贈られたものらしいが、デイケンズはその肖像を身近に置きながら、日夜どんな想いに耽ったものか。——時期が前後するが、メアリの死後、その同じ年の夏に綴った挽歌の一節に、こうある。

うら若き乙女の墓のほとりに

われ 昨夜立てり

うるはしき穢れなき乙女は

清らに耀けり

燃ゆる夏日のごと

花はひらき

香気むせぶばかりにて

そは はや萎れ果てぬ

美しき花こそ はかなく散りて

貴き玉

ときを待たず錆びるに似たり

ああ 森羅万象のいただきに

季節の移ろひ

すでもとむべし

一八三七年五月六日の晩、デイケンズは妻キャサリンとその妹メア리를同伴して芝居見物に出掛けた。デイケンズが書いた一幕物「彼の女房？」を観に行ったわけだが、劇場は観客でごった返していて、誰も彼もが『ピクウィク・ペイパーズ』の作者による笑劇に大いなる関心を寄せていた。

デイケンズは幸福の渦のなかに身を浸していた筈である。月々の「ピクウィク・ペイパーズ」分冊は飛ぶように売れて、同時に「オリヴァ・トウイスト」も毎月着々

と世に出てゆく。昨春、スコットランド出版界の名士ジョージ・ホガースの長女キャサリンを妻に迎えて、その妹メアリも傍にいる。数ヶ月前には長男が生れ、デイケンス自身の生い立ちに大きく欠落していたもの——家庭の幸福が、今こそ彼の日常を隈なく包み込んでいるかに見えた。

——芝居は上出来であった。三人は夜更けに帰宅したあと暫く居間でくつろぎ、やがて談笑に区切りがついたところでメアリは階上の寝室へと引退った。これから永遠の眠りに就こうとは、勿論、本人とて知らない。

メアリは寝巻に着替える暇もなく寝台の傍らに崩れたのである。物音に驚いて家族が寝室に駆け込んだときには、もう、メアリは眼を閉じたまま床上に横たわっていた。

家中、忽ち騒然となった。召使は医者を招びにすぐさま暗い街へと飛びだした。キャサリンは妹の名を何度も呼び、デイケンスもまた同じことを繰返す。メアリは眼をうつすらと開き、低声で、どうやらデイケンスのことを切れ切れに呟いているらしいが判然としない。デイケンスは掌の窪みにブランディを注ぎ、その滴をメアリの口中に垂らしてやった。一体全体、どういうことになっ

たのか、皆目判らない。

医者が来た。各種各様の手当てが試みられた。しかし、ついに努力の甲斐なく、翌日午後三時、メアリはデイケンスの腕に抱かれたまま永眠した。

同夜、デイケンスは知人のエドワード・チャブマン宛にメアリの死を手短かに報じている。その書翰末尾の署名にはひどい顫えが見えて、署名に続くべきいつもの闊達な飾りつけなども省略されている。翌日のデイケンスの手紙は四通までが現存していて、それを見ると、辛うじて平静を装いつつこのたびの不幸を諸方に報せている様子がありありと偲ばれる。

「妻の妹、若くて可愛い妹、私どもが結婚して以来ずっと我家の恵みであり耀きであったあの娘が、昨日、この家にて亡くなりました。……」

「一昨日の晩、私たちと一緒に芝居を観に行き、あんなに元気だったのが、夜中にいきなり具合が悪くなり、今ここに遺体となつて横たわっている。……」

「医者云うには、彼女は長らく心臓を患っていたらしいということですが。それまでの普段の様子と、あんなふうに突然の死が訪れたことからして、医者の言は正しいに違いない。……」

その後デイケンズは仕事も手につかず、とうとう「ピクウィク・ペイパーズ」および「オリヴァ・トウイスト」の連載を中断してしまったことは人も知る通りである。デイケンズはハムステッドのコリンズ・ファーム（現在ワイルズ・ファーム）にて心の傷を養った。当地からトマス・ピアドに宛てた長い手紙——黒枠の喪中箋に綴った手紙の現物が、デイケンズ・ハウス「メアリの寝室」に展示してあって、これもまた胸を打つ。

ハムステッドの寓居には友人のジョン・フォースターやエインズワスが訪れて、野良道を共に散歩しては近辺の酒場へ——「スパニアーズ・イン」とか「ジャック・ストローズ・カスル」へと立寄り、デイケンズは僅かに悲しみを忘れる一ときを得た。

そうこうするうちに傷心のひと月が流れ、デイケンズの気持も次第に落着きを取り戻したようである。六月八日、メアリの親戚筋に宛てた手紙は頗る名文であるが、ここでデイケンズは、さながら昔日の燃ゆる思い出を噛みしめるかのようにメアリの死を述懐している。

……愛しいメアリは拙宅にて突然の死を迎えました。貴方様にこの件をお知らせするよう早くから頼ま

れていましたが、まずは簡単に一筆認めんと思いつつ、ペンがその折の前後を描こうとすれば忽ち胸が痛み、如何ともしがたかったこと、どうかお察し下さい。

くだくだしく申し述べるつもりもありませんが、五月七日土曜の晩、メアリはそれらしき兆しすら見せぬまま寝室へ上り、突然具合が悪くなって——その後回復を祈り、ありとあらゆる努力を払ったにも拘らず、しかも最後の最後まで、まさか生命の危険なぞ予想だにされなかつたのに、メアリはとうとう病魔に屈して不帰の人となりました。いとも静かな、安らかな眠りでした。生命の灯の未だ消えやらぬあいだ（彼女は当方の掌からブランディの滴を飲みました）、しばし私の両腕に抱かれていましたが、その魂が天高く飛び去ったあとも、私はなお知らずして骸を抱きつづけておりました。……

メアリの遺骸はハロウ通りの美しい墓地に葬られました。ほんの二、三日前、墓参に出掛けてみたところ、墓の周りには青草茂り、花々は眩しく咲きあふれ、それら草花の根の下ろす土中に形くずれ色失いしものが在ろうなぞとは、よもや考えられぬ趣でした。私の足もと深く、静かに厳かに骸は横たわり、この世の健康

も美も、さながら春の夜の夢のごとし——そんな感慨を禁じ得ませんでした。……

あとに残されて在りし日々のメアリを偲び、あのやさしい顔付や、うっとりとするような微笑、あどけない気性とやわらかな性格から生れる数々の美点、ああ、それらを恋しく偲ぶ人たちこそ同情され慰められるべきではありませんか。その胸痛める人びとのなかでも、とりわけ朝に夕に彼女を想い、その死を嘆くこと実に甚だしきは、おそらくこの私を措いてほかにありますまい。

ロンドン西北の郊外ケンサル・グリーン墓地にメアリの墓がある。「墓の周りには青草茂り……」の言葉通り、今も、人目につかぬ寂れた片隅に灰色の墓石がひっそりと佇んでいる。墓石の文字を読むと、弟のジョージもまた四年後に若くして亡くなったことが知れる。やはり一夜のうちに急死したらしい。その二十余年後に母が、さらに七年あとに父親が他界して、いずれも土中ふかくメアリの傍に眠っている。

話はさかのぼるが、デイケンズがメアリ・ホガースに

初めて会ったのは一八三四年の冬で、ときに娘はまだ十五歳であった。メアリは姉のキャサリンと大そう仲が好くて、事あるごとに姉を励ましながら協力を惜しまなかつたらしい。先にも触れたジョージ・ホガース宅でデイケンズはこの姉妹に会ったのである。

翌年五月に姉はデイケンズと婚約することになるが、それよりも前に、メアリからデイケンズへ贈物を渡しているのが興味ぶかい。三四年に銀のペンナイフ、三五年に旅先用のインク壺が、「M・S・H」および「C・D」なる互いのイニシャルをかつちりと刻んで贈られた。なかなか立派な代物で、いずれも「メアリの寝室」硝子箱のなかに収められている。デイケンズは返礼のつもりであったか、緑色紅雀石のペンダントをメアリに贈り、これにも同種のイニシャルが、「FROM C. D. TO M. S. H. 1835」と刻み込まれている。

これらの贈物とキャサリンの婚約話が、どういう前後関係にあったものか詳らかでないが、これほどの贈物をこれほど早くから、デイケンズとメアリのあいだで遣り取りされていた事実は注目してよい。ここに何やら自然な匂いを嗅ぐ者があつても不思議はあるまい。

しかし、デイケンズなる男は、そもそも謎のふかい怪

物なのである。尋常な物差しを当てがうわけにはいかず、ありふれた発想の網なぞにもかかるまい。謎は暫く謎のままに沈めておくほうが賢明であろう。

死んだメアリを作中に蘇らせようとの願いは、しばしば云われるように、『オリヴァ・トウイスト』のローズ・メイリの登場を以て始まる。ところが、これにまつわるディケンズ自身の心境は実に複雑であったようである。オリヴァとローズの触れ合いを描いたクルークシャンの挿画がディケンズの機嫌を損ねて、構図から背景から、全く別様の挿画と差替えられることになった。今、新旧を較べてみると、ローズの表情はそれぞれ別人である。先の挿画のローズにはメアリ・ホガースのあのふくよかな横顔が窺えるものの、それが没にされた。理由はよく判らない。

ローズ・メイリのあとにはケイト・ニクルビ、少女ネール、メアリ・グレアム等々と続き、ディケンズの件の執着は、ついに『デヴィッド・コパフィールド』のアゲネスに至って終る。否、一応終る、と云っておかねばならない。若きディケンズを襲った一つの事件、すなわちメアリ・ホガースへの思慕とその死は、前半期作品の最後の一作で仮そめの区切りがつけられ、彼の胸奥ふかく静か

に沈んで行つたかに見える。——但し、表向きそう見えるわけである。

註

- (1) Slater Michael, *Dickens and Women*, J. M. Dent & Sons Ltd, 1983, p. 81.
- (2) Poem by Dickens, *Bentley's Miscellany*, Aug. 1837.
- (3) To George Thomson, W. H. Ainsworth, Richard Bentley, *George Cox Letters*, Vol. I, pp. 256-258.
- (4) *Letters*, Vol. I, p. 268.

二、荒涼館

ケント州東部の海べりにブロードステアズの町があつて、ここは昔、ディケンズのとりわけ好んだ地であつた。海風が吹き、カモメが飛び、白い砂浜が遠くまで延びている。ディケンズがここを初めて訪れたのは一八三七年というから、まだ二十代半ばで、初期の作品を書いていた頃であつた。

デイケンズは保養および執筆のためにブロードステアズをたびたび訪れたが、或る年、海洋に臨む崖上の館が目に留り、これを大そう気に入って借りることに決めた。俗に荒涼館アブソラクションと呼ばれる別荘だが、当時はフォート・ハウスという名称であった。

当地はひなびた漁村で、ひどく静かな所です。崖上に私どもの家があり、窓の下には海がうねり波が打寄せて参ります。沖合七マイルの所にグッドウイン砂州グッドウインというのがある、暗くなると浮標の灯が頼りにまばたき、まるで女中らに密通の合図でも送っているかのようにです。……

九時から一時までのあいだ、やや長目の髪にノウ・ネクタイの紳士が張出窓のところで書き物をしながら、いかにも愉快この上なしとばかりに、にやにや笑っています、紳士の名はボズとあって、一時になると姿を消してしまい、ほどなく海水浴車の中からひよっこり現れたり、あるいは紅鮭色のイルカよろしく海中に抜手をききついている姿などが見うけられます。そのあと彼は一階の別の張出窓の傍らでたつぷり昼食をとり、食後に十二マイルもの散歩をしたり、ときには砂

浜に寝ころんで本など読んでいるのです。話しかけてもらいたいとの顔付でも見せぬかぎり、皆が彼をそっとしておくので、それはそれは、快適至極の毎日であるようです。……

(一八四三年、フェルトン教授宛)

既に知られている通り、荒涼館、とは後世の人が勝手にそう呼んだまでのことで、デイケンズの小説『荒涼館』とは何の関係もない。デイケンズはこの館で、書齋の窓いっぱいひろがる大海原を展望しながら『デヴィド・コパフィールド』の多くの章を書いた。しかし、それもさして重要な事とは思えない。船だの嵐だの波のとどろきが作中に出現することは事実だが、おそらくデイケンズは、海の見える書齋であつてもなくても書くべきを書いた筈である。なぜなら、彼の想像力の裡側には昼夜を分かつた「荒波」が躍っていたのだから。

デヴィド少年がドーヴァに住む伯母をたずねる件りは何度読んでも新鮮だが、あの明るい陽射を浴びた家と、芝生に踏み込んだ驢馬を追いちらす伯母とは、ブロードステアズに実際のモデルが在ったとされている。メアリ・ピアソン・ストロングなる老嬢がその人で、お婆さ

んの家は現在、「デイケンス展示館」として公開されている。

作品と実物の関係はとかく人びとの好奇心を刺激して止まないが、その種の詳細を集めた書物など練っている、つい誘われて、ゆかりの町や通りや建物を一見してみたくなる。大抵は失望に終るのだが、失望を恐れて眼をつむってしまえば気持のほうが落着かない。

例えばデヴィド・コパフィールドの生れた村はサフォク州のブランドストーンということだが、実際の地名はブランドストーンで、一日ここを訪れると、道ばたのあちこちに野花がひっそりと咲き、やわらかい風が吹いてそこはかとなく旅情を募らせる。静かな田舎道のむこうから、いかにも村の農夫とおぼしき赤黒い顔の、人の好きそうな男が自転車をこいで来る。それやこれや、作品とは別に、小さな額にでも収めておきたい風景なのがある。

さらに、ブランドストンの近くにはグレイト・ヤーマスの町があつて、北海に面したその海岸は、デヴィド少年が乳母のペゴティに案内されて舟の家に泊る所である。またこの海では、作品のあとのほうでステイアフォースが、そしてハムが溺死することにもなる。現実の

ヤーマス海岸は赤砂糖にも似たやわらかな砂浜がどこまでも続き、夏ともなれば海風に肌をさらす老若男女のくつろぎの地となっている。

——話をブロードステアズに戻す。

六月下旬の一週間余り、ブロードステアズの町はデイケンス祭に賑わい内外の客を集めているが、祭の山場は、荒涼館およびデイケンス展示館前の芝生にて練りひろげられる。別に驚くほどの催しでもないが、要するに、前世紀の衣装をまとった男女が、あたかもデイケンスの作中から飛びだして来たかのごとく芝居じみた仕事を演じて見せる。お祭りだから、それで結構なのである。むしろ驚くべきは、かくも大勢の人びとが、朝から晩までデイケンスに酔いデイケンスに浮かれるという目出度き光景そのものであろう。

ブロードステアズは十九世紀の中頃から海辺の保養地としてぼつぼつ脚光を浴びるようになり、それにつれて町も騒々しくなった。デイケンスは雑音を嫌ってやがてこの地を去ることになるが、彼の脳裏には、古き良き時代の、のんびりとした寒村の面影がいつまでも残った。

……空、海、浜辺、また村が、まるで絵を描いてく

れとばかりに我等の眼前に凝つとしてゐる。汝は干いたまま動かさない。黄金色の麦穂は崖上にさざ波を立て、あたかも古い記憶にすがりつつ僅かながら海をまねているかのようだ。蝶の群れがハツカダイコンの葉の上を忙しく飛び交い、こちらはさながら風に弄ばれるカモメのよう。けれども海は、ちよつど睡たげなライオンにも似て、陽だまりのなかでまばたきをしながら横たわっている。……(1)

デイケンズの多くの作品は大都市の喧騒のなかから生れたとも云えるが、一方、それとは全く対極に位置する世界を——誰もがふと懐しい気分誘われるような或るものを、彼は切にもとめていたようである。ブロードステアズでのデイケンズの生活が、そのあたりを暗示しているように思えてならない。

註

(1) Dickens, 'Our English Watering-Place', *Household Words*,

1852.

三、夢と幻と

ロチエスタ境界は幼いデイケンズの夢を育んだ土地である。ロチエスタの隣町チャタムに五歳から九歳までの少年時代を過して、ときには前代の小説を耽読したり芝居を觀たり、ときには父親の手に引かれて野辺や川ぶちなどを散歩した。ロンドンの暗黒生活に墮ちてゆく前の、さながら小春日のごとき穏やかな日々であつた。少年の眼に映り、耳に届いた声が、のちの彼の文学に芽を吹いたと解釈したくなるのは自然である。

デイケンズが生れたのはポーツマス郊外のマイル・エンド・テラス一番地だが、實際、ここで生れたというだけのこと、一家はそのあと五ヶ月足らずで引越してしまふからデイケンズ自身に生家の記憶はない。むしろ彼の両親にとつて、ここは新婚当初の懐しい思い出の家であつたらう。デイケンズとしては、晩年の公開朗読の折にここを訪れたきりで、古里というほどの強い感情を温めていたようには思えない。現在ではデイケンズ生誕の家として公開され、その一室には、デイケンズが最期の息を引きとつたという寝椅子などが運び入れられて置い

てある。誕生と死を環につないでみせたと云おうか、無論、後世の演出に他ならない。

二歳のときにポーツマスからロンドンへ、続いて五歳の折にチャタムへと、デイケンズはあちこち引連れられて足場が定まらなかつた。父親の仕事の関係だから已むを得ないが、神経過敏の子供の眼に、家族やら家庭というものが果たしていかに映つたものか。一家が転々と居を移すこの間、デイケンズの弟や妹が生れては死んだ。彼の幼少の世界はつねに浮動して、崩壊と再生とが繰返されていたのである。その合間に照り映えた小春日和は洵に短かつた。

ともあれ、デイケンズの心の古里は、やはりチャタムであろう。そしてロチェスタの町や、その周辺の野良道であつたらう。最初の小説『ピクウィク・ペイパーズ』の旅がロチェスタに始まり、最後の作品『エドウィン・ドルードの謎』がロチェスタの町なかを舞台に展開するというのも、思えば興味ぶかい偶然である。

ロチェスタの北西二、三マイルの所にギャズ・ヒル・プレイスの館があり、デイケンズは晩年の十年余りをここに住んだ。前述の寝椅子なども、デイケンズの死後、ここからわざわざポーツマスまで運ばれて行つたわけ

ある。ギャズ・ヒル・プレイスは緑の森に包まれた古い赤煉瓦の建物で、デイケンズが少年時代の散歩の道すがら溜息まじりに眺めた夢の館なのであつた。

さらに北西三マイルほどの所に、チヨークの村がある。ここは新妻キャサリンを伴いハネムーンに訪れた地で、これもまた若きデイケンズの一もとの夢が根を下ろした麗しき土地に違いない。仕合せな家庭を有つことが、彼のかねての夢であつた。

チヨークの村はずれに『大いなる遺産』のジョー・ガージェリの鍛冶場と目される寂れた建物が見えるが、それよりもなお惹き付けられるのは、はるか東方に静めるクーリングの村のたたずまいである。『大いなる遺産』第一章に描かれる夕暮れの沼地と、鉛色の一すじの河と、赤と黒の激しく交錯する夕空の模様がたちまち眼前に甦る。そしてあの胸に迫る一節――。

父母のお墓のそばには、長さ一フィート半ほどの小さな菱形の石が五つ、きちんと一列に並んでいるのでありました。それは私の幼い五人の兄弟の、想い出の標しるしでありました。

實際、クーリングの墓地に並んでいる菱形の石は三三個で、これはその昔、村のコンポトなる一家が次々と幼児を亡くした恨みの墓石なのである。デイケンズがこの墓地を訪れて、『大いなる遺産』書出しのひらめきを得た事実は既に知られている。

墓や死のイメージはデイケンズの作中とどこどこに出没するが、それが彼の想像力を動かしていたと飛躍して考えるならば、デイケンズにとって、人生すなわち一片の幻と云うべきか。

思えば、デイケンズの結婚生活もついに破綻した。自力で富を築いて獲得したギヤズ・ヒルの夢の城にしても、夜ごとの社交や仕事に追われてしまつては安らぎの場でも何でも無い。また古く懐しいロチェスタの町にせよ、野花の咲く川べりにせよ、しまいに嫉妬と頹廢と殺人の臭いを沈める『エドウィン・ドルードの謎』に変貌してしまつた。何という結末であることか。

ロチェスタとその周辺はデイケンズが長くこだわり続けた土地でありながら、夢はついに彼の掌中に止まらず、幻の羽音を残して虚空高く飛び去つてしまつたかに思われるのである。

四、デイケンズ・ハウス余録

デイケンズアン、と呼ばれる人たちは、氣持の底でデイケンズの魔力を怖れながら、それでもなお惹かれて止まない連中だと云つた人がある。毒を毒として避けるのではなくて、逆にその危険物に手が伸びる。そういう振れた心の働きは、いかにも厄介千万に見えるが、判らないでもない。

彼等は毒に中つて散々苦しむ。つまり、苦しみつつ、各種各様の努力を試みるわけである。デイケンズの伝記だの書翰、時代背景やら作品周辺をめぐるあれやこれやの文献、研究書の類なぞ繕き、この怪物の正体を何とかつかんでやれという気になるらしい。デイケンズ文学の底流に「監獄」あり、と思えば、ロンドンのバラ地区に苔むした外壁を残すマーシャルシイ監獄趾や、その近くの、デイケンズ少年が孤独の下宿住まいに泣いたというラント通りなどにも足を向けてみたくなる。或いはまた、十九世紀ロンドンの悪と腐敗と活力との濃厚なる混合、それこそがデイケンズ文学の核心を成すとなれば、今度はテムズ南岸からジェイコブズ・アイランド近辺へ、さ

らにフェイギン一味の巢窟を臭わせるホウボン地区の暗い辻また辻、例のサフロン・ヒルあたりも歩いてみないでは気が済まない。

しかしそういう試みを一わたり卒おえておきながらも、一旦作品に眼を転ずるや、たちまち摩訶不思議な力に包み込まれてしまうのは如何ともしがたいらしい。実に怖るべき魔力である。私の想像ではあるが、デイケンジアともなれば、皆、この魔力を痛いほどに知っているようである。

並みいるデイケンジアのなかでも最大級の人と云えば、例えばロンドン大学のマイクル・スレイタ教授ではなかるうか。以前、ロンドンに滞在してデイケンズのことをあれこれ調べていた折、スレイタ教授には随分啓発され、お世話になったが、しかしそのために氏をここで持上げているのではない。

スレイタ教授を訪ねて話を伺うと、氏の巨きな軀が波打って、高からず低からず、まことに甘美な声のひびきが耳許をくすぐる。気取ることの全然ない人である。ちょうどあのピクウィク氏が本のなかから抜けだして、こっちに話しかけて来るかと思われる。「人間は環境の犠牲者、なかんずく最大の犠牲者は——このわたし」虚実

のピクウィク氏はかく申されたものである。

スレイタ教授に連れられて『ハード・タイムズ』の講演会や、『バーナビー・ラッジ』刊行百五十年の催しなどに出掛けたが、そういう機会には本場のデイケンジアが群れをなして面白。研究発表だの質疑応答などもあるにはあるが、日本の学会での趣とは少々異なる。さらに作品朗読や、懇親をかねた茶話会となると少々どころか大いに異なるところであり、要するにイギリス式なのである。つまり、デイケンズと並んで「自分」がある、自分がどんなふうに関わっているかという強い主観が断固として揺るがないのである。デイケンジアとは、デイケンズの魅力を徒らに振廻して自ら溺れてしまっている哀れな輩を斥すのではない。そういう事情が、イギリス本国であって、はつきりと実感されるのである。

ダウティ街のデイケンズ・ハウスに通いつめて調べ物をしたことがある。地下の小部屋を借りてデイケンズの手紙なぞ読んでみると、どうにも気持が落着かない。

「……………」

大きなテーブルのむこうにデイケンズの胸像が置いてあって、デイケンズの視線が、こっちの手許の書翰集に

凝つと注がれている。ご本人に見られていると、非常にやりにくい。

——君、君、そんな物を読むのは止せ。

デイケンズが邪魔をする。

——それは不可ん、君、恥ずかしい手紙だよ。

デイケンズがしきりに介入するので仕事がちつとも進まないのである。暫く黙つていてももらいたい、と文句をぶつけてやろうとしたら、係の男が地下室に降りて来て一人の老婦人を紹介した。キャスリン・ティロットスン、女史だと云うので驚いた。私かに尊敬する著者となると、よもや手足を動かし肉声を発するお方とは思えないものである。その不思議な人が、間違ひなく両足で歩いて来て挨拶をされたのだから、こんなに愉快なことはない。

女史はテーブルの向いに陣取るなり、同伴の若い男を相手にケラ刷りのようなのを一頁ごとに確認して、ぶつぶつやり出した。男はいちいち相槌を打ちながら感心している。二人の関係はさっぱり判らないが、女史の講釈は立板に水の勢いで止まるところを知らず、蜿蜒三時間ほども続いた。呆れるばかりの情熱である。ここにもまた大型のデイケンジアンを仰ぐ思いであった。

デイケンズ・ハウスでの想い出は一、二に止まらない

が、重ねて一つ、夏の夕べにワンマン・ショーを観たときのことを記しておきたい。地下の図書室に二十脚ばかりの椅子を並べて、観客にはめいめいワインが振舞われ、いささかいい気分になったところでショーが始まった。入口の扉が徐ろに開き、威儀を正した鬚もじやの紳士が現れて、

「えへん、私の名はチャールズ・ジョン・ハファン・デイケンズ」

と来たかと思うと、

「さて、この私が話の主人公たるべきか、或いは他の誰かがその役を担うことになるのか……」

どこかで聞いたような台詞を吐くのである。無論、これは『デヴィッド・コパフィールド』冒頭の一節だが、彼は図書室の書架をざつと見渡して、

「ほほう、私の本が並んでいるね」

なぞと感心しながら、個々の作品の周辺事情をあれこれ語りだす。オリヴァは楽に書けたとか、ネルの描写では涙がこぼれた、スクルージという奴はなかなかいいだの、ミコーバ爺さんが懐しいなど、次から次へ引張りだすかと思えば、編集者某々は気に食わん、挿絵画家の誰々はよく頑張ってくれたというような月旦評まで繰り

ひろげる。話は滔々と流れて一点の澱みもつくりえず、作中からの引用も実に多い。作者自らが語るのだから、これほど真に迫った話はないわけである。デイケンズが二十世紀末に蘇生してダウテイ街の自宅に我々を招いてくれたのだ、今宵はなんと愉しいことか、と喜ばずにはいられない。

「デイケンズの魔力は、その言葉にある。言葉の発散するえも云われぬ苦味甘味をそのまま舐めるがよい。どの作品、どの一頁を開いてみても味があるう」

とワンマン・シヨアのデイケンズ氏——もはや一人の俳優に立戻った素顔の氏が、こんなふうには話を結んだ。彼の真意であつたに違いない。